

小児鼻副鼻腔炎における咳嗽

増田佐和子, 臼井 智子

国立病院機構三重病院 耳鼻咽喉科

【はじめに】小児の咳嗽の原因として鼻副鼻腔炎は重要であるが、鼻副鼻腔炎における咳嗽の頻度は不明である。そこで、小児鼻副鼻腔炎における咳嗽の状況について検討した。

【対象と方法】2014年10月から2015年7月までに当科を受診した12歳以下の鼻副鼻腔炎患児70名(1~12歳・中央値5歳, 男児49名・女児21名)について、症状や所見, 実施した検査・治療について調査票に記入し, 解析した。

【結果】主訴は鼻汁が37%, 鼻閉が12%, 咳嗽が15% (湿性13%・乾性2%)であった。症状として何らかの咳嗽があったのは46名66%で, 後鼻漏を自覚していたのは9名13%, 咽頭雑音を認めたのは21名30%であった。咳嗽のある46名のうち, 43名が湿性咳嗽であった。咳嗽がある群は, ない群に比べて有意に低年齢であったが, 男女比や上顎洞陰影の程度には差は認められなかった。咳嗽の有無で他の症状の有症率を比較すると, 咳嗽のある群で有意に咽頭雑音の頻度が高かったが, 鼻汁, 鼻閉, 後鼻漏の自覚の頻度には差は認められなかった。

【結論】小児鼻副鼻腔炎における咳嗽の頻度は高く, そのほとんどが湿性咳嗽である。小児では後鼻漏を訴える頻度は少ないが, 湿性咳嗽や咽頭雑音に注意して鼻副鼻腔炎の評価を行う必要があると考えられた。

【キーワード】鼻副鼻腔炎, 小児, 咳嗽, 後鼻漏